

特別展

鈴木政吉が住んだ町 ～幻となったヴァイオリンの里

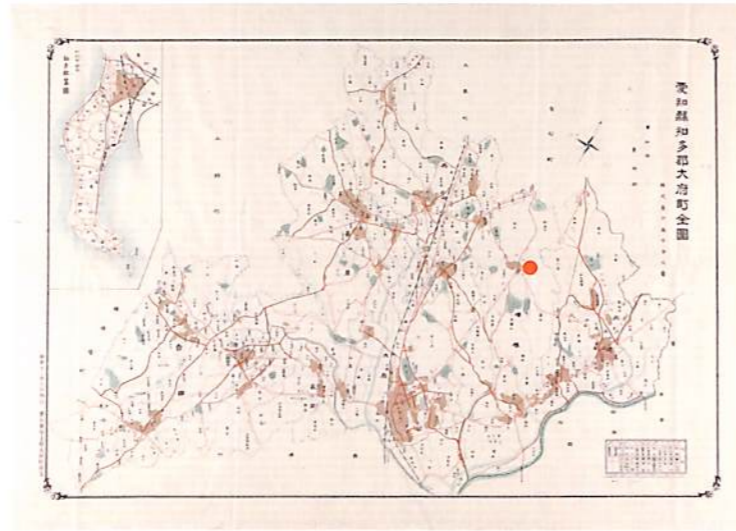


大府市歴史民俗資料館

昭和10年代、大府町大字横根字名高山(現:梶田町六丁目)周辺に、ヴァイオリン製造で世界的に知られる「鈴木バイオリン製造株式会社」の大府分工場があったことを知っていますか？

昭和12年(1937)刊行の『愛知縣知多郡大府町全図』に記載されている工場の印で、その場所を確認することができます。(赤●で加筆表記)

昭和初期の大府町は、まだ人口も少なく、大府駅東側の町並みを除けば、人家もまばらで、なだらかな丘陵地帯が続いていました。大府町を南北に貫く有松街道と、共和と北崎を結ぶ道路が交差する名高山に「鈴木バイオリン製造株式会社」と高橋広治氏によって創設された鶏の研究施設「日本家禽研究所」がありました。



【愛知縣知多郡大府町全図】

1. ヴァイオリン

ヴァイオリンは、単に弦楽器の一つというだけではなく、その姿形を眺めているだけでもその美しさに心惹かれてしまう美術作品のような存在の楽器です。

16世紀初頭、芸術・文化等の中心であった北イタリアで作られ、その力強い音色と豊かな表現力でイタリア以外のヨーロッパ各国にも広く存在が知れわたりました。

17世紀、フランス国王ルイ13世により宮廷音楽を受け持つ楽隊として「王の24のヴァイオリン」と呼ばれる弦楽合奏団が組織されると、ヴァイオリンは弦楽器群の中でも最高音域を担当する楽器となり、現在の弦楽オーケストラの先駆けとなりました。また、音楽の中心が宮廷内サロンから劇場やホールに移るとヴァイオリンも改良され、音量・音域が広がりました。当時、王侯・貴族から一般市民へと広がってきたオペラにおいても、広い劇場のすみずみまで音のおお最適な楽器として演奏されました。

18世紀、バロック期の著名な作曲家たちの多くはヴァイオリン奏者でもあり、ヴァイオリンをオーケストラの基盤とした楽曲が多く作られ、中でもアントニオ・ヴィヴァルディ(1678-1741)は、「四季」を始め多くのバロック作品を残しました。

16世紀から18世紀にかけて、イタリア・クレモナの職人たちの手によって作られたヴァイオリンの何点か(例えばストラディヴァリウスやガルネリなど)は、何世代にもわたって演奏家たちに愛用され、現在でも使われ続けている名器です。ヴァイオリン製作の技術は、イタリアからフランス・ドイツへと受け継がれていきました。

現代オーケストラにおいて、ヴァイオリンのセクションは第1ヴァイオリンがメロディ、第2ヴァイオリンが和音で支えることが一般的になっています。第1ヴァイオリンの首席奏者は、『コンサートマスター』と呼ばれ、オーケストラ全体のまとめのほか、作品中にヴァイオリンのソロ部分があれば演奏も担当します。

2. ヴァイオリンの渡来

ルイス・フロイスが記した『日本史』によると、16世紀中頃には基督教の伝来とともに、日本にもヴァイオリンらしき洋楽器が伝えられ、修道士らがミサでの演奏用に日本の子どもたちに教えたと言われています。しかし、その後の基督教の禁止・鎖国令等により当時の洋楽器との関わりは完全に失われてしまいました。

明治になり、各地に外国人居留地が出来るとアレキサンダー・クラーク(英国人)は、横浜で洋楽器の輸入商を開業しました。明治12年(1879)、音楽学校の前身:音楽取調掛(後の東京音楽学校)が設置されてからは、ドイツ系外国人教師らによりヴァイオリン奏者の養成が行なわれ、少しずつ日本にもヴァイオリンが広まってきました。その後、日本国内でもヴァイオリンの製作が開始され、日本人もヴァイオリン製作に携わりました。その中の一人が鈴木政吉です。

3. 鈴木政吉

鈴木政吉は、尾張藩の下級武士:鈴木正春・たに夫妻の次男として安政6年(1859)に名古屋東区宮出町で生まれました。武士といえどもわずかな家禄だけでの暮らしは苦しく、父の正春は音曲好きを活かして三味線作りの内職を行ない、どうにか家族6人を養っていました。政吉は次男でしたが、長男が早世していたために家を継ぐ立場にありました。

明治6年(1873)、14歳になった政吉は従妹の嫁ぎ先である東京・浅草の塗り物商・飛騨屋の奉公人となりましたが、3年後に店主夫妻が亡くなり店舗が閉鎖されると帰郷し、家業となった三味線製造に従事する一方、長唄の稽古にも通うようになりました。飛騨屋での奉公で勤勉を身に付けた政吉は、明治10年(1877)に家督を相続し、一家を支えることになりました。

明治期の西洋第一主義のような時代の中で、和楽器の衰退は避けようもないと感じた政吉は、明治20年(1887)、学校教育に新しく採用された「唱歌」の教師になれば高給が見込めるのではと、長唄の稽古仲間を頼り愛知県師範学校教師、恒川鏡之助氏の門を叩きました。そこで、同門の甘利鉄吉氏が購入してきた「日本製ヴァイオリン」を目にすることになりました。

「ヴァイオリンは、西洋で200年も前から非常に尊敬されている楽器だが、鈴木さん、これを一つ作ってみてはどうか」という甘利氏の言葉で、政吉は音楽教師への道をやめてヴァイオリンの製作に取り掛かりました。



【鈴木政吉】

甘利氏より、ただ一夜借り受けた「日本製ヴァイオリン」を徹夜で模写し、記憶を頼りに作りあげた苦心の第一号ヴァイオリンを恒川氏や甘利氏に見せたところ、大いに褒められたものの、二人は購入するまでには至りませんでした。



【第1号ヴァイオリン】

この第1号ヴァイオリンは、鈴木家に家宝として現在も保存されています。

その後、ヴァイオリン修繕を頼まれた機会にじっくりと現品を吟味し、手掛けた第2号ヴァイオリンには買い手がつき、更には注文も入るようになり、ますます政吉はヴァイオリン製作にのめり込んでいきました。

ヴァイオリン作り始めた頃、旧知の仲であった松岡義賢氏から「良い物を安く作り、誰も付いて来ることができないようにするのが自然の専売だ」と聞かされた政吉

は、【いいものを安く作って売る】ことを会社の信条としていました。

政吉は、ヴァイオリンを始め多くの弦楽器を製造するだけでなく、自ら東京・大阪での販売元確保のために奔走、海外輸出のために外遊を行ないました。また明治・大正・昭和初期と国内外で催される多くの博覧会にヴァイオリンなどの製品を出品し、そこでの審査成績を仕事の励みにしていました。大正期には、次々と来日する外国人演奏家たちの名古屋での演奏会を主催し、彼らの名器を調整したのも政吉でした。

大正11年(1922)、それまで量産品としてのヴァイオリン製作を工場で行なってきた政吉は、後世に遺すべき手工ヴァイオリン製作へと意識を変化させ、以降亡くなるまでの約20年間、古銘器の音を再現するための【済韻】研究に没頭し、作り出された政吉と長男梅雄の手工ヴァイオリン「済韻」は、販売品目の一つに加えられました。

昭和初期、世界恐慌の影響を受けた会社の倒産後、政吉夫妻は大府町名高山の工場隣接地に転居し、邸内に新設した【済韻研究所】で亡くなるまでヴァイオリンの研究に励み、昭和19年(1944)に満84歳の生涯を閉じました。晩年の政吉が書いた書軸が2点、大府小学校に寄贈されていました。

4. 鈴木バイオリン製造会社

ヴァイオリンを初めて政吉が目にしてから1年余りの明治21年(1888)、「片手間仕事では舶来品のヴァイオリンに太刀打ち出来ない」と家業を三味線製造からヴァイオリン製造へと変更し、会社を設立しました。

明治23年(1890)、東門前町に作業場を設置、同年3月に開催された【第三回内国勸業博覧会】にヴァイオリ



【鈴木バイオリン工場】

ンを出品、最高位である3等有功賞を受賞し、その後も次々と国内外の博覧会にヴァイオリンなどの製品を出品し、数々の賞を受賞しました。

明治27年(1894)に始まった日清戦争により世間に軍歌が流行すると、洋楽器の中では手軽なヴァイオリンの需要が大いに高まりました。政吉はヴァイオリン製作において、機械で全てがまかなえないものの部分加工を可能にする機械を自ら発明し、手作業のみの職人仕事から機械を導入した近代式工場生産にすべく明治36年(1903)に、松山町に工場を設置しました。

明治45年(1912)、明治天皇崩御により一年間の音曲停止令が下り不況となると、長男の梅雄を東京から呼び戻し、政吉の右腕として海外進出用の英文用カタログ等を作らせました。

大正3年(1914)、第一次世界大戦が欧州で始まると、世界のヴァイオリン市場を独占していたドイツからのヴァイオリン供給が途絶え、世界各国から注文が入るようになり、イギリス・アメリカなど海外への輸出によって事業を拡大し、一時は従業員数が1,000名を超えるほどの世界的な楽器メーカーとなりました。また、博覧会での受賞が続いていたこの頃、政吉製のヴァイオリンが皇室買上げになることもありました。



【高松宮宣仁親王所用ヴァイオリン】

今回の特別展では、学習院大学史料館に収蔵されている「高松宮宣仁親王所用ヴァイオリン」3点を順次、公開しています。

昭和5年(1930)に個人経営から株式会社(鈴木バイオリン製造)へと組織変えをしましたが、世界恐慌の影響により昭和8年(1933)に和議破産となり、翌年には下出義雄氏を社長に迎え、会社の再建には長男の梅雄が奔走しました。昭和10年(1935)大府分工場を新設し、隣地には創業者政吉のための【済韻研究所】が建てられました。昭和

16年(1941)梅雄は社長に就任し、本社を岐阜県恵那市に戦時疎開させました。

戦後、ヴァイオリン・ギターなどの製造を再開させ、昭和21年(1946)に名古屋市中川区に本社を移転、恵那工場は分工場となりました。恵那分工場はその後、系列会社を経て独立し「恵那楽器」となりました。「鈴木バイオリン製造株式会社」は昭和46年(1971)に鈴木秩氏が、平成12年(2000)には鈴木隆氏が社長に就任し、政吉のヴァイオリン製作への技術と情熱は、今日まで脈々と受け継がれています。



【鈴木バイオリン工場の内部】

5. 大府に建てられた分工場

昭和9年(1934)、政吉が「鈴木バイオリン製造株式会社」の社長を退き、下出義雄氏を社長に迎えると、実質的に会社の立て直しに奔走していた長男の梅雄は、翌年に大府町大字横根字名高山に大府分工場を新設しました。何故、大府に分工場が設置されたのかを考える時、昭和7年(1932)に三男である鎮一が記した「日本ヴァイオリン史」の中に次のような文章がありました。

(前略)

最近に於いては、^{ドイツ}獨逸のマルクノイキルヘンの例に倣ひ、名古屋近郊3哩の^{ちてん}地點に、ヴァイオリンの村を建設、永久にヴァイオリンの産地として之を遺すべく^{けいかく}遠大なる^{じつげん}計畫が立てられ、遠からず實現する筈である。

(後略)



【日本ヴァイオリン史】

また、ドイツへの外遊経験があった梅雄は、大府町のなだらかな丘陵地に点在している農家を見て、ここにドイツと同じ様なパーツ作りの村を作り、そこで出来たパーツを集めてヴァイオリンに仕上げることができれば、機械加工の量産品ではなく手工による安価なヴァイオリンが作れるのではないかと。大府町に「楽器生産の村・マルクノイキルヘン」を再現しようと考えていたようです。大府分工場の隣接地には、政吉がヴァイオリンの音色を研究する場所として【済韻研究所】が設置されていました。

同年、喜寿(77歳)を迎える政吉の音楽界における功績を讃えるために、有志により胸像の作成が開始され、やがて完成した胸像は、時局がらひとまず大府分工場内に保管されました。その後恵那工場へ疎開し、昭和30年(1955)になって現在の本社(名古屋市中川区)前に移設されました。



【済韻研究所】

大府分工場の新設と同じ頃に、大府町には多くの工場が進出してきたため、梅雄の思い通りにはならず、時代的にも日中戦争から始まる経済統制、資材不足から楽器製造はままならなくなり、大府分工場は昭和19年(1944)の楽器製造全面廃止によって、三菱重工業名古屋航空機製作所に買収されました。

6. 鈴木鎮一とスズキ・メソッド

鈴木政吉の三男として明治31年(1898)に生まれた鎮一は、市立名古屋商業学校を卒業すると、兄たちと同じように父親のヴァイオリン工場で働くこととなりました。

しかし、鎮一は数年で体調を崩し、療養先で北海道の実業家・柳田一郎氏の一家と親しくなったことが、その後の人生を大きく変えることとなりました。柳田氏に誘われ、徳川義親侯爵率いる北千島探検旅行に参加した鎮一は、船内でヴァイオリンを演奏したことから、義親侯に「音楽をしたら」と勧められました。義親侯は、政吉にも「息子を演奏家にしたら」と声かけをしてくれたので、鎮一は東京の徳川邸に寄宿して幸田露伴の妹でヴァイオリニストの安藤幸からヴァイオリンの手ほどきを受けることができました。

大正10年(1921)、徳川侯爵らの世界一周旅行に同行し、途中寄港したマルセイユで一行と別れた鎮一は、一人ドイツに留学し、ベルリン高等音楽学校の教授であったカール・クリングラー氏の唯一の内弟子となり、ヴァイオリンのテクニックだけでなく人間としての生き方など精神的にも大きな影響を受けました。ドイツではアインシュタインを始めさまざまな知識階級の人々が集うホームコンサートに出入りし、ドイツの豊かな音楽の教育環境の中で、音楽の能力があればどの分野に行っても高い能力を発揮することができるという信念を持つようになりました。

大正14年(1925)に一時帰国していた鎮一は、翌年、長兄の梅雄とともに父である政吉が製作した手工ヴァイオリンを持って、ドイツのアインシュタインを訪ね、贈呈しました。その時の礼状が、鈴木バイオリン製造株式会社に保管されて

います。

昭和3年(1928)、聖歌隊で歌っていたドイツ人のワルトラウトと結婚した鎮一でしたが、母危篤の報を受けて帰国後は、3人の弟たちと【鈴木カルテット】を結成して、演奏活動を活発に行いました。当時の日本にはまだ室内楽団が少なく、兄弟による本格的な【弦楽四重奏団】として有名になりました。【鈴木カルテット】は、第一ヴァイオリンが鎮一、第二ヴァイオリンは喜久雄(六男)、ヴィオラは章(四男)、チェロは二三雄(五男)という構成で、いずれも父政吉の手による弦楽器を使用していたのも特徴的でした。また、鎮一は帝国音楽学校を東京に設立して後進の指導にも当たりました。



【鈴木カルテット】

戦後、長野県松本市に疎開していた帝国音楽学校時代の同僚から松本音楽院開設に当たり、鎮一に手伝ってもらいたいとの要請がありました。「幼児教育に対する新しい考え方と方法で、小さい子どもたちを教えていくことが出来るのであれば」という鎮一の条件が受け入れられ、ヴァイオリンとピアノの教室からスズキ・メソッド(音楽による幼児の才能教育法)は始まりました。松本市に住まいを移した鎮一は、『全国幼児教育同志会』を結成、昭和23年(1948)には『才能教育研究会』と改称しました。



【アインシュタインの自画像】



【アインシュタインからの手紙】

『才能教育研究会』での「すべての子どもは等しく能力を持っている」という考え方は、「天才」や「英才教育」を否定しており、教育界からの反発は大きいものでした。

昭和30年(1955)、第1回全国大会(現在のグランドコンサート)が開催され、1,200人の子どもたちによる大合奏が行われました。その後、アメリカで開催された弦楽教育者会議において、第1回全国大会で演奏された800人の子どもたちによるドッペル・コンチェルトの記録映画が紹介されると、このスズキ・メソードの研究のために各国から研究者が続々と来日しました。

昭和39年(1964)から平成6年(1994)まで続けられた子どもたちによる海外演奏旅行の評価は海外でも高く、鎮一には欧米の大学から名誉博士号の贈呈が相次ぎました。

平成6年(1994)、鎮一の「95歳祝祭コンサート」には、世界で活躍するスズキ・メソード出身の演奏家たちが駆けつけて大いに盛り上がりました。平成10年(1998)に鎮一は、99年の生涯を閉じました。



【鎮一と子どもたちによるグランドコンサート】

本市出身で世界的ヴァイオリニストとなられた竹澤恭子氏や、水野紗希氏も、スズキ・メソードで学んでいたと知ると何か見えない糸で結ばれていたのかもしれない。

昭和の一時期とはいえ、鈴木バイオリン製造株式会社が、大府でヴァイオリンを作っていたことを市民の方々に広く知っていただくために、展示・紹介をしました。

主な参考文献：『日本のヴァイオリン王 鈴木政吉の生涯と幻の名器』（井上さつき著 平成26年）

『東海の異才・奇人列伝』（小松史生子編著 平成25年）

『郷土にかがやく人々 下巻』（愛知県教育振興会 昭和32年）

『銃後と云う名の“戦争迷路”』（広瀬治雄著 平成15年）『大府町史』（大府町 昭和41年）

『大府市誌』（大府市 昭和61年）『新修名古屋市史 第四巻』（名古屋市 平成11年）

『新修名古屋市史 第五巻』（名古屋市 平成12年）『愛に生きる』（鈴木鎮一著 昭和41年）

『明治日本と万国博覧会』（伊藤真実子 平成20年）『室内楽 音楽講座第11篇』（鈴木鎮一著 昭和7年）

『鈴木鎮一誕生110年記念 第52回スズキ・メソードグランドコンサート』（社団法人才能教育研究会 平成21年）など

謝 辞：本展示の開催・パンフレット作成にあたり、多くの方々にご協力・ご教示を賜りました。ここにあらためて感謝申し上げます。

このパンフレットは平成29年度 特別展『鈴木政吉が住んだ町～幻となったヴァイオリンの里』のために作成したものです。

● 会 期：平成29年9月30日(土)～平成30年1月21日(日)

● 編集・発行：大府市歴史民俗資料館

〒474-0026 大府市桃山町五丁目180-1

TEL(0562)48-1809 FAX(0562)44-0033